「人文学系」教育評価報告書

（平成１４年度着手　分野別教育評価）

福岡女子大学文学部

平成１６年３月

大学評価・学位授与機構

◇　大学評価・学位授与機構が行う大学評価

○大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1　評価の目的

大学評価･学位授与機構（以下「機構」）が行う評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，その結果を，①大学等にフィードバックし，教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の教育研究活動等について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2　評価の区分

機構の行う評価は, 今回報告する平成 14 年度着手分までを試行的実施期間としており，今回は以下の３区分で評価を実施した。

⑴ 全学テーマ別評価（国際的な連携及び交流活動）
⑵ 分野別教育評価（人文学系，経済学系，農学系，総合科学）
⑶ 分野別研究評価（人文学系，経済学系，農学系，総合科学）

3　目的及び目標に即した評価

機構の行う評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，教育研究活動等に関して大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，目的及び目標が，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統, 規模や資源などの人的･物的条件, 地理的条件, 将来計画などを考慮して，明確かつ具体的に整理されていることを前提とした。

○分野別教育評価「人文学系」について

1　評価の対象組織及び内容

今回の評価は，設置者から要請のあった大学の学部及び研究科（以下「対象組織」）を対象とし，学部，研究科のそれぞれを単位として実施した。

評価は, 対象組織の現在の教育活動等の状況について, 原則として過去５年間の状況の分析を通じて，次の６項目の項目別評価により実施した。

(1)　教育の実施体制
(2)　教育内容面での取組
(3)　教育方法及び成績評価面での取組
(4)　教育の達成状況
(5)　学習に対する支援
(6)　教育の質の向上及び改善のためのシステム

2　評価のプロセス

(1)　対象組織においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を平成 15 年７月末に機構へ提出した。

(2)　機構においては，専門委員会の下に評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査を実施した。

なお，評価チームは，各対象組織により，教育目的及び目標に沿って評価項目の要素ごとに独自に設定された観点に基づき分析を行い，その分析結果を踏まえ，要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献（達成又は機能）の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で評価項目全体の水準を導き出した。

(3)　機構は，これらの調査結果を踏まえ，その結果を専門委員会で取りまとめた上，大学評価委員会で評価結果を決定した。

(4)　機構は，評価結果に対する意見の申立ての機会を設け，申立てがあった対象組織について，平成 16 年３月の大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

3　本報告書の内容

「Ⅰ　対象組織の現況及び特徴」,「Ⅱ　教育目的及び目標」及び「特記事項」欄は，対象組織から提出された自己評価書から転載している。

「Ⅲ　評価項目ごとの評価結果」は評価項目ごとに，貢献（達成及び機能）の状況を要素ごとに記述している。

また，当該評価項目の水準を，これらの状況から総合的に判断し, 以下の５種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

・十分に貢献（達成又は機能）している。
・おおむね貢献（達成又は機能）している。
・相応に貢献（達成又は機能）している。
・ある程度貢献（達成又は機能）している。
・ほとんど貢献（達成又は機能）していない。

なお，これらの水準は，対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり，相対比較することは意味を持たない。

また，評価項目全体から見て特に重要な点を，「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

「Ⅳ　評価結果の概要」は，評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は，評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について，その内容を転載するとともに，それへの機構の対応を示している。

4　本報告書の公表

本報告書は，対象組織及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

Ⅰ　対象組織の現況及び特徴

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

１．現況

（１）　機関名　　福岡女子大学

（２）　学部名　　文学部

（３）　所在地
福岡県福岡市東区香住ヶ丘１丁目１番１号

（４）　学科構成
国文学科
英文学科
人文学系

（５）　学生数及び教員数
①学生数
学生数　　４００名
国文学科　　２０３名
英文学科　　１９７名

②教員数　　２７名
国文学科　　９名
英文学科　　９名
人文学系　　９名

２．特徴

福岡女子大学に特徴的な教育目的は，その前身である，大正１２年創設の公立女子専門学校の初代校長小林照明が学生に告げた建学の精神にうかがえる―「新時代の男女の機会均等へ第一歩を印する諸姉は，校舎の貧しさに心揺るがすことなく，内面的教養の充実に専心し，理想高くリファインされた淑女として，社会の先覚者として自覚を持って勉学されたい」。この精神は，昭和２５年，国文学科，英文学科及び生活科学科からなる学芸学部をもつ４年制女子大学に引き継がれ，学則第一条に，本学の目的は「専門の学芸を研究教授」すると共に，「その応用力を豊かに」しながら,「文化の創造と社会の福祉に貢献することができる女性を育成すること」であると述べられている。

昭和 29 年の改組で福岡女子大学には家政学部(平成 7 年に人間環境学部に改組)と文学部の２学部が設置された。国文学科と英文学科の２学科，及び全学の教養教育と教職課程に責任を持つ人文学系とで構成されるこの文学部は，全学共通科目（教養科目）と専門科目を有機的に組み上げたカリキュラムを編成することによって，国際化・情報化の進む厳しい時代を生き抜くための「鋭い思考力」と「総合的な判断力」を身に付けた学生を養成することを目指している。そして更なる教育と研究の充実を図って，平成 5 年には大学院文学研究科（国文学専攻・英文学専攻修士課程）が設置された。

国文学科は，九州においても数少ない学科である。その特性を活かし，地味ではあるが，文化の継承者の育成を目的とし，日本語についての通時的あるいは共時的な知識を十分身につけた表現力豊かな人材, 文学･芸術に対する理解力をもち，伝統的文化の継承発展に寄与できる知識人を育てるよう努めている。それは，卒業後，民間企業に就職するものが比較的多く，社会の国際化の中，外国語能力，就中，英語力もさりながら，十分な日本語能力と，日本の伝統的文化や芸術に対する知識とを有することが，基礎教養として有用なものと思われるからである。また一方では，中・高等学校教育に関わる職業に就くものも少なくなく，これも日本語能力の高さと国文学などへの造詣の深さとが必須の条件と思われるからである。

英文学科は，九州における英語学・英米文学教育研究の一つの拠点として，文化全般にわたる学際的な知識を培う全学共通科目（教養科目）を基礎として，幅広い視野から英語学・英米文学の専門知識を習得させ，国際的にも活躍できる，優れた語学力と豊かな教養を備えた人材を育成することを目標としている。その実現のために，1 年次から，学生が広く学際的な知識･情報を習得できるように, 全学共通科目と専門教育科目をバランスよく配置し，4 年次の英文による卒業論文作成に至るまでの教育課程を積み上げている。本学科は, これまで多くの有能な人材を育成してきた。卒業生の多くは民間企業に就職しているが，公務員，中･高等学校の教育者として活躍しているものも少なくない。平成５年に大学院文学研究科修士課程，続いて平成９年に大学院博士後期課程を設置してからは，修了後，中・高等学校や高専・大学で教育･研究に携わる者の数は増えている。

Ⅱ　教育目的及び目標

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

１．教育目的

国文学科，英文学科の入学定員は各々４５名で，前身である公立女子専門学校(文科４０名)以来の少人数教育を維持している。教職等の専門職を目指す女性人材の育成に伝統的に取り組んできた。

このような伝統を有する福岡女子大学文学部としての教育目的を整理すると次のようになるであろう。

（１）多様な教育背景を有する学生を受入，その一人一人の個性と能力に目を向けた教育の重視。

（２）豊かで幅広い教養と専門的学識を備えた人材の育成。

（３）双方向の授業を重視する少人数教育を通して自主的な思考と判断力を培うこと。

（４）在学中及び卒業後の地域社会への貢献を視野にいれた応用力豊かな人材の育成。

（５）文化の継承と創造に係わる活動ができる自己課題設定能力の養成。

（６）教育現場と教職員との有機的関係とその活性化。

２．教育目標

（１）的確な学生選抜によって学生の学力を把握し，適切な教員配置による少人数教育を通して学習の動機付けを高めていく。　[目的（１）・（３）・(４)]

（２）教養教育及び教職課程に責任を持つ人文学系の教員は，歴史，文化，社会，教育に対する学生の総合的な関心を育むと共に，専門領域の学識を高めながら，狭く限定された分野に偏らないカリキュラムによって，豊かな知識を培う。　[目的（２）・（４）]

（３）少人数ゼミ形式の授業を活用することによって，学生が能動的に課題を展開していく意欲を促し，議論の実践によって自己表現能力を高める。　[目的(１)・（３）・(５)]

（４）言語運用能力の向上を図りながら，種々の資格取得の意欲を高めるとともに，国際交流や地域社会に向けてのボランティア活動やインターンシップへの関心を高めていく。　[目的（４）]

（５）クラス担任制，新入生ガイダンス，上級生オリエンテーション，オフィス・アワーの設定，附属図書館・ＬＬ教室・情報処理演習室の利用など，学習への支援活動の充実を図る。　[目的(１)・（５）・（６）]

（６）学生による授業評価の活用，大学教育改革の研修会などへの参加を通して，教育の質と内容の改良を行う。　[目的（６）]

（学科ごとの独自の教育目標）

○国文学科

国文学科では,幅広い視野から国文学･日本語学の専門知識を習得させることを主眼に置き，学部から大学院修士課程までの教育を有機的に関連させつつ，次のような教育目標を設定している。

（１）伝統重視の立場にたち，通時的観点から，各時代に偏りの少ないバランスのとれた教員の配置を行う。　[目的(２)・(３)・(５)・(６)]

（２）少人数の演習形式による授業を行い，図書館のみならず国文学共同研究室を積極的に利用した調査研究を行わせ，日本語の基礎や表現に熟達させるべく，添削指導などを通じ自筆原稿による卒業論文の作成に導く。　[目的(１)・(２)・(３)・(４)・(６)]

○英文学科

英文学科では，学部から大学院博士後期課程まで一貫して続く英語学・英米文学教育を有機的に連携させることを教育目標の中心に据えている。しかし学部卒業者の多くが民間企業に就職していくことを考慮して,柔軟な思考力･判断力と英語運用能力の養成を目指す。

（１）学生の英語学･英米文学への適性を判断できる，きめ細かい学生選抜を行い，入学後の教育に携わる教員の配置も分野的にバランスをとる。　[目的（１）]

（２）少人数授業やオフィス・アワーにおいて，学生の受講科目・研究分野選択の相談・助言を行う。英語運用能力の向上を目指す学生には，外国人教師の授業を入学時から数多く設ける。　[目的（１）･(２)･（３）･（５）]

（３）少人数ゼミ形式により，発表・討論中心の授業を行い，学生の自主的思考を培う。中間･期末レポートでは，きめ細かく添削指導（日本語･英語）し，それによって正確な英語による卒業論文作成に導く。　[目的（３）･（６）]

III　評価項目ごとの評価結果

１．教育の実施体制

この項目では，対象組織における「教育の実施体制」について，「教育実施組織の整備に関する取組状況」，「教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況」及び「学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素１】教育実施組織の整備に関する取組状況

学科の構成は，国文学科，英文学科及び全学共通の人文学分野科目と教職科目を担当する人文学系からなっている。学部全体の教員と学生の比率が 1:15 という環境の中で，学生に対して少人数での教育を行う体制が構築され，きめ細かい指導を実践している。しかし，国文学科，英文学科，人文学系の３組織間のより緊密な連携については，今後の検討課題である。これらのことから，学科の構成は相応である。なお，学生が少人数でのきめ細かい指導体制に対して好意的な評価を行っていることが，訪問調査において確認された。

教員は「福岡女子大学教員資格審査基準」及び「福岡女子大学文学部教員選考内規」により採用・昇格が行われる。教員組織の構成については，年齢構成，専門分野等において，全体としてほぼバランスが取れている。なお，英文学科では今後採用する教員について，若手教員(40 歳以下)を採用する計画が策定されており，更にその際には教員の母語や性別に関しても考慮されることとなっている。女性教員の占める比率については女子大学として更に配慮すべき点ではあるが，教員組織の構成は相応である。

【要素２】教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況

教育目的及び目標の趣旨を学生，教職員に対して周知・公表する方法として，年度の初めに新入生ガイダンスや上級生オリエンテーションを開催しており，特に新入生に対しては５月の連休中に２日間の合宿研修を開催している。オフィスアワー（授業内容等に関する学生の質問等に応じるための時間として教員があらかじめ示す特定の時間帯）の設定は分散的であるが，むしろ各教員と学生が日常的に接触の機会を持つことにより，コミュニケーションを保ち，周知・公表の体制を整えている。これらの取組は，相応である。

学外者に対しては，オープンキャンパス（大学が受験生等を対象に学校説明会を開いたり，見学・模擬講義等を体験させる試み）の開催や新聞社，出版社が主催する進学説明会への参加，ホームページでの公表といった取組により，教育目的及び目標の趣旨の周知・公表を行っている。なお，オープンキャンパスへの参加が入学のきっかけとなった学生も訪問調査において確認された。また，県内の高等学校へは教員が出張して講義を行っており，学部への関心を高める努力がなされている。これらの取組は，相応である。

【要素３】学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況

学生受入方針の策定については，「福岡女子大学案内」等の印刷物における記述が十分ではなく，明文化されているとは言い難い状況であるため，改善の必要がある。なお，平成 16 年度入学試験用の入試要項には，学生受入方針が掲載されることが決定している。

学生受入方針の学内外への周知・公表については，「福岡女子大学募集案内」及び「福岡女子大学募集要項」の高等学校への送付，オープンキャンパス等での周知に加え，平成 14 年には新聞社等の主催する進学説明会に 11 回の参加を行っている。周知・公表の体制として相応であるが，入学者のうち帰国子女，私費外国人留学生，社会人が占める比率は高くなく，広報面での一層の努力が期待される。

学生受入方針に従った学生受入方策として，特別選抜においては論文試験や面接試験を課している。また，希望者には入学試験点数の開示を行っている。これらの取組は相応である。

この項目の水準は，「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

◇特に優れた点及び改善点等

学生に対し，少人数クラスできめ細かい指導を実践しているのは，優れた取組である。

国文学科，英文学科，人文学系の３組織間のより緊密な連携については，今後の検討課題である。

学生受入方針の策定については，「福岡女子大学案内」等の印刷物における記述が十分ではなく，明文化されているとは言い難い状況であるため，改善の必要がある。

２．教育内容面での取組

この項目では，対象組織における「教育内容面での取組」について,「教育課程の編成に関する取組状況」及び「授業の内容に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素１】教育課程の編成に関する取組状況

教育課程の編成については，教養科目と専門教育科目を１年次から相互に組み込む「くさび型」の編成を取り入れ，専門に偏らない総合的な思考力を養うように配慮している。また，１年次の「入門」や「概説」といった基礎科目から２，３年次の専門的な基礎知識を経て，４年次での卒業論文に結び付ける，段階的な積み上げ方式のカリキュラム編成が取り入れられている。学生の過重負担を避け，自主的な調査研究の十分な時間を保証するための履修制限，４年次で卒業論文作成に着手する際の最低取得単位数の設定なども行われており，これらの取組は優れている。

資格取得に向けた科目の開講や,インターンシップ(学生が在学中に企業等において自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと）の実施，基礎学力が不足している学生に配慮した科目の開講を，学科ごとに行っている。なおインターンシップの実施にあたっては,福岡県インターンシップ推進協議会を介して参加しているが，学生が希望しても受入れられない場合や，受入期間等の点から，現在のところ単位化は行われていない。入学後の学科・専攻の変更については，欠員が生じた場合に可能となっているが，学生の満足度が高いこともあり，変更希望は実際にはほとんど見られない。よって，教育課程の編成上の配慮は相応であり，きめ細かく行われている。

【要素２】授業の内容に関する取組状況

教育課程の編成の趣旨に沿った授業内容とするため，非常勤講師も含めて教員の授業内容には絶えず検討を行い，学生の単位修得に関する意見・要望を聞く機会として年１回「教職員学生協議会」を開催するなど，自己点検に努めていることは，相応である。しかし，学生の「教職員学生協議会」への認知度は高くないことが訪問調査からうかがわれたため，開催にあたっての周知・公表の方法には検討の余地がある。また，学生による「授業評価アンケート」を実施しており，学生からの要望を考慮して科目名の変更を行うなど，教育方法の改善に努力しているが，アンケートは全担当科目が対象とはなっていない。これらのことから，取組には改善の必要がある。

教育内容等の研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント，以下「ＦＤ」という。）については，教務委員会の下にＦＤ部会の設置が現在検討されているものの，学部としてのＦＤへの取組は教員各自の教育方法の検討に任されているため，問題がある。

シラバス（各授業科目の詳細な授業計画）は進学説明会やオープンキャンパス等において受験生にも配付し，その活用が図られていることから,相応である。しかし，記載内容には教員ごとにばらつきがあり，また成績評価の基準・方法が独立した項目として明記されていない。教務委員会において検討された結果，来年度から成績評価基準を独立した項目とした形でシラバスに記載することとなっているが，現時点では改善の必要がある。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

◇特に優れた点及び改善点等

学部としてのＦＤへの取組については，教員各自の教育方法の検討に任されているため，早期の検討が必要である。

３．教育方法及び成績評価面での取組

この項目では，対象組織における「教育方法及び成績評価面での取組」について,「授業形態，学習指導法等の教育方法に関する取組状況」,「成績評価法に関する取組状況」及び「施設・設備の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素１】授業形態，学習指導法等の教育方法に関する取組状況

英文学科で２，３年次に開講される科目「プロゼミ」においては，論文作成法の指導やレポートの添削などが行われており，国文学科においては「特別研究」により卒業論文指導が行われている。また，卒業論文作成スケジュールについては，各教員が学生の事情に応じて柔軟に対応を行っている。少人数教育の徹底，対話・討論中心の指導に配慮されており，教育課程を展開するための教育方法として，優れている。

外国人留学生には日本語科目を開講し，ティーチング・アシスタント（学部の教育補助業務を行う大学院学生，以下,「ＴＡ」という。）も活用している。また「演習」,「プロゼミ」,「卒業論文指導」の科目では学生に課したレポートを添削した後に返還するなど，教育方法等についての配慮がなされている。なお，チューター制度（外国人留学生に対し日本人学生が学習や生活上の様々な支援・助言を行う制度）は採用されていないが，留学生からの相談には学科主任,クラス担任が対応している。これらのことから，取組は相応である。

【要素２】成績評価法に関する取組状況

卒業論文は主査・副主査による審査の後，各学科で判定会議を開き，評価基準に偏りが無いか点検する体制が整っている。また，卒業論文作成上の注意点や不合格になる恐れのある事例等については，卒論合宿研修や卒論ゼミにおいて，日常的に指導がなされている。これらの取組は相応であるが，成績評価基準の設定は教員各自の裁量に任されており，またシラバス等で独立した項目としての明示がないことは，検討の必要がある。

成績評価にあたっては，レポート，定期試験，小テスト等が教員各自の判断によって行われている。一部ではレポートの評価だけに留まらず,添削指導を行っている。成績評価に対する学生からの異議申立て制度は制定されていないが，申立てがあった場合には，評価の理由を詳しく説明することにより対応している。よって取組は相応である。

【要素３】施設・設備の整備・活用に関する取組状況

施設の整備・活用については，講義室，演習室，セミナー室のほか，附属図書館，情報処理演習室，ＬＬ教室等の整備が行われている。情報処理演習室にはパソコンが 48 台設置され，教員の操作を視認するための専用のディスプレイがテーブルごとに配置されている。また，マルチメディア講義室が新設され，情報処理教育にも配慮がなされている。各学科には共同研究室が設けられており，学術雑誌類や辞書を配置することで，学生の自主学習に役立てている。施設の整備・活用は相応であり，適切に行われているが，訪問調査では，一部建物の老朽化や空調設備の不備について，改善を求める要望も確認された。

関連設備，図書等の整備・活用については，女性学・生涯学習関連の図書を所蔵する「生涯学習研究センター」が設置されている。附属図書館は通常午後８時まで開館されており，館内には「自習室」,「ブラウジング・ルーム」や入館手続きを経ずに利用できる「自由閲覧室」が備えられ，学生に対する配慮がなされている。これらのことから，整備・活用は相応であり，適切に行われている。なお蔵書数は学生数に比して多数整備されているが，洋書の整理が十分でないことなどから，卒業論文作成時には他大学への資料収集が必要となるケースもあるという学生からの指摘も，訪問調査では確認された。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

◇特に優れた点及び改善点等

英文学科で２，３年次に開講される科目「プロゼミ」においては，論文作成法の指導やレポートの添削などが行われており，国文学科においては「特別研究」により卒業論文指導が行われている。少人数教育の徹底，対話・討論中心の指導に配慮されており，教育課程を展開するための教育方法として，優れている。

４．教育の達成状況

この項目では，対象組織における「教育の達成状況」について,「学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況」及び「進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況」の要素ごとに教育目的及び目標に照らした達成の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の達成の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

◇目的及び目標に照らした達成度の状況

【要素１】学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況

過去５年間の進級率・卒業率は，ともに９割を超えている。また，過去５年間において中・高等学校教諭一種免許状を国文学科で 56.7%，英文学科では 47.9%の学生が取得するなど，単位修得，資格取得状況についても良好な達成状況を示している。これらのことから，学生が身に付けた学力や育成された能力から判断した達成状況は，優れている。

学生による授業評価アンケートの集計結果からは，教員への評価は高く，授業についての評価は，それよりやや低いという結果が出ている。しかし，訪問調査の結果から学生の授業に対する満足度も高いことが確認された。そのため，学生の授業評価結果等から判断した達成状況は，相応である。

【要素２】進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況

近年の経済不況にもかかわらず，過去５年間の文学部全体の就職率は７割を超えていることから，卒業後の進路の状況から判断した達成状況は，相応である。なお，就職した学生の企業を訪問し勤務状況等について説明を受けるなどの，学部としての就職対策が行われているほか，教員志望の学生には修士課程修了による教育職員の専修免許状取得の利点を伝えるなど，進学指導も行われている。

平成 14 年度に「将来構想委員会」が卒業生を採用している企業の雇用主を主たる対象として，アンケート調査を行っており，その調査結果からは卒業生に対して肯定的な評価が見受けられることから，達成状況は相応である。

この項目の水準は,「教育目的及び目標において意図する教育の成果が相応に達成されている。」である。

◇特に優れた点及び改善点等

過去５年間の進級率・卒業率は，ともに９割を超えている。また，単位修得，資格取得についても良好な達成状況を示していることから，優れている。

５．学習に対する支援

この項目では，対象組織における「学習に対する支援」について,「学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況」及び「自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素１】学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況

授業科目の選択については，新入生のための「新入生オリエンテーション」,在学生のための「上級生オリエンテーション」において，学科主任と授業担当者全員が説明を行っている。なお，専攻の変更を希望する学生に対しては，学科主任及びクラス担任が相談を受ける体制となっているが，実際に希望する例はほとんどない。卒業論文に関しては，３年次生を対象に卒業論文説明会を開催し，指導教員や題目の確定に十分時間をかけるように配慮を行っている。このようにガイダンスはきめ細かく実施されており，優れている。

学習を進める上での相談・助言については，クラス担任制により体制を整えているが，むしろ教員各自による丁寧な指導が学生に対して有効に機能していることが訪問調査からも確認された。また，学生相談室では外部から専門のカウンセラーを招き,学生の相談に応じている。更に，セクシュアル・ハラスメントを防止するための取組として「福岡女子大学ハラスメントの防止等に関する指針」を定め,「セクシュアル・ハラスメント防止・対策委員会」を整備し，相談員制度も機能している。これらの取組は，優れている。

【要素２】自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況

附属図書館は通常午後８時まで開館されており，館内には「自習室」,「ブラウジング・ルーム」や入館手続きを経ずに利用できる「自由閲覧室」などが設けられ，学生の自主的な学習に利用されている。また，情報処理演習室にはパソコンが 48 台設置されているが，授業開講時以外の時間帯には情報検索等に自由に利用することができる。更に，専任助手が常駐している共同研究室には学術雑誌類や辞書が配置されている。一部の建物の老朽化や空調設備について改善が求められているが，学生の自主的学習を支援するための環境はよく整備されていることから，優れている。また，留学生に対しては優先的に寮に入寮できるようにするなど，配慮を行っている。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に十分に貢献している。」である。

◇特に優れた点及び改善点等

授業科目の選択については，新入生のための「新入生オリエンテーション」，在学生のための「上級生オリエンテーション」において，学科主任と授業担当者全員が説明を行っている。卒業論文に関しては，３年次生を対象に卒業論文説明会を開催し，配慮を行うなどガイダンスはきめ細かく実施されており，学生支援体制が十分に整備されていることは，優れている。

６．教育の質の向上及び改善のためのシステム

この項目では，対象組織における「教育の質の向上及び改善のためのシステム」について,「組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制」及び「評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況」の要素ごとに改善システムの機能の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の機能の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

◇改善システムの機能の状況

【要素１】組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制

教育の質の向上及び改善に関わる案件は，学科会議で議論し，更に「教務委員会」,「将来構想委員会」の検討を経た後，学部教授会が検討し決定する。文学部長は教務委員長を兼任し，全学将来構想委員会にはオブザーバーとして出席している。また全学共通科目運営委員長は，教務委員会に出席することとなっている。このように，上記の組織は連携し合い，組織として教育の実施状況や問題点を把握し,教育活動を評価する体制が整っている。また，全学組織である「自己点検・評価委員会」により，定期的に自己評価を実施する体制も整備されており，過去の自己評価としては，全学的な授業評価アンケートが実施された。これらのことから，体制は相応である。

外部者による教育活動の評価については，今後積極的に検討し，更にシステム整備のための研究が行われる予定であるが，これまでに具体的な外部評価に着手しておらず，現時点で組織体制も整備されていないことは，問題がある。

個々の教員の教育活動を評価する体制は,「教務委員会」が学生による「授業評価アンケート」の動向をまとめているが，教員の自主的努力・改善に負うところが大きく，体制が整備されていないことは，問題である。

【要素２】評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況

平成 15 年７月の「教務委員会」において，ＦＤ部会を「教務委員会」の下に設置することを決定し，９月の教授会において２名が文学部ＦＤ委員として承認された。しかし，現時点で評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステム及び方策については,「自己点検・評価報告書」等を活用した教員各自の取組に任されており，フィードバックのためのシステムも整備されていないのは，問題である。

この項目の水準は,「向上及び改善のためのシステムがある程度機能している。」である。

◇特に優れた点及び改善点等

外部者による教育活動の評価については，今後積極的に検討し，更にシステム整備のための研究が行われる予定であるが，これまでに具体的な外部評価に着手しておらず，現時点でシステムも整備されていないことは，問題がある。

Ⅳ　評価結果の概要

１．教育の実施体制

学生に対し，少人数クラスできめ細かい指導を実践しているのは，優れた取組である。国文学科，英文学科，人文学系の３組織間のより緊密な連携については，今後の検討課題である。

ガイダンスの開催により，各教員と学生が日常的に接触の機会を持ち，教育目的及び目標の周知・公表の体制を整えていることは，相応である。

学生受入方針の策定については，「福岡女子大学案内」等の印刷物における記述が十分ではなく，明文化されているとは言い難い状況であるため，改善の必要がある。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

２．教育内容面での取組

教養科目と専門教育科目を１年次から相互に組み込む「くさび型」の編成を取り入れ，専門に偏らない総合的な思考力を養うように配慮している。また，段階的な積み上げ方式のカリキュラム編成が取り入れられている。履修制限，最低取得単位数の設定なども行われており，これらの取組は優れている。

学部としてのＦＤへの取組については，ＦＤ部会の設置が現在検討されているものの，教員各自の教育方法の検討に任されているため，早期の検討が必要である。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

３．教育方法及び成績評価面での取組

論文作成法の指導やレポートの添削のほか，少人数教育の徹底，対話・討論中心の指導に配慮されており，教育課程を展開するための教育方法として，優れている。

成績評価にあたっては，レポート，定期試験，小テスト等が教員各自の判断によって行われており，取組は相応である。

施設の整備・活用については，講義室等の整備が行われているほか,各学科には共同研究室が設けられており,学術雑誌類や辞書を配置することで，学生の自主学習に役立てているが，一部建物の老朽化や空調設備の不備について，改善を求める要望も確認された。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

４．教育の達成状況

過去５年間の進級率・卒業率は，ともに９割を超えている。また，単位修得，資格取得についても良好な達成状況を示していることから，優れている。

過去５年間の文学部全体の就職率は７割を超えていることから,卒業後の進路の状況から判断した達成状況は,相応である。

この項目の水準は,「教育目的及び目標において意図する教育の成果が相応に達成されている。」である。

５．学習に対する支援

「新入生オリエンテーション」,「上級生オリエンテーション」を開催しており，また卒業論文に関しては，３年次生を対象に卒業論文説明会を開催し，配慮を行うなど，ガイダンスはきめ細かく実施されており，学生支援体制が十分に整備されていることは，優れている。

一部の建物の老朽化や空調設備について改善が求められているが，学生の自主的学習を支援するための環境はよく整備されていることから，優れている。また，留学生に対しては優先的に寮に入寮できるようにするなど，配慮を行っている。

この項目の水準は,「教育目的及び目標の達成に十分に貢献している。」である。

６．教育の質の向上及び改善のためのシステム

外部者による評価については，今後積極的に検討が行われる予定であるが，これまでに具体的な外部評価に着手しておらず，現時点でシステムも整備されていないことは，問題がある。

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステム及び方策については,「自己点検･評価報告書」等を活用した教員各自の取組に任されており，フィードバックのためのシステムも整備されていないのは，問題である。

この項目の水準は,「向上及び改善のためのシステムがある程度機能している。」である。

◇　特記事項

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

以上の自己評価結果を踏まえて，各項目ごとの現状認識と今後の課題および将来への展望を述べたい。

1　教育の実施体制：学科の学生定員及び教員数は少人数教育の徹底を図るという目標に相応しい。また，教員の配置も様々な研究領域をカバーしているので，学生が選択する多様な研究テーマに応えている。教育目標の学生や学外者への周知に関しては,小規模の大学であり，かつ少人数教育を徹底しているために，学内においては十分行き届いている。ただし,学外への周知という点では,今後,「大学ホームページ」の更なる充実を図り，高等学校あるいは一般社会への働きかけをさらに強める必要があろう。学生受入方針は，多様な学生の受入態勢は整っている。推薦入試に関しては,基本的な学力を備えた学生であれば，入学後の少人数教育によって，本学が目標とする柔軟な思考力を備えた，社会に貢献できる学生を十分育成していくことが出来ると考えているので，今の所は静観するという態度を取っている。推薦入試も時間をかけて学生の資質を判断すれば，本学の理想とする学生の育成に有効であると思われるので，今後も検討を続けて行きたい。

2　教育内容面での取組：教育課程の効果的な編成は,学生の要望に十分応え得る組み上げを行い，学科のスタッフ及び教務委員が常時学生の意見を聞き，新たな要望に応える態勢をとっている。しかし,経済不況下の学生の就職難という状況を考えるとき，今後さらに教育課程の改革を進め，実社会により貢献できる学生の養成を図る必要があろう。「教務委員会」や「将来構想委員会」は，現在もこの問題を検討しているが，今後さらに緊急の問題として検討し，すばやい行動をとる必要があろう。また,教育方法に関する研修会への本学教員の参加も今後は積極的に行う必要がある。

3　教育方法及び成績評価面での取組：少人数教育を基本としている本学では，学生が効果的に学習するための細かい配慮をしており，成績評価面でも，単に評価だけに終わることなく，その後の学生の学習の発展につながる教育的指導を行っている。しかし,教育施設の整備に関しては，設置者の理解を得て，さらにゆとりのある教育環境の実現を目指したい。

4　教育の達成状況：学生の単位取得状況は，おおむね問題はないと思われるが，学生の「授業評価アンケート」をさらに有効に利用して,学生にとって満足のいく教育を達成するように努力しなければならない。卒業後の学生の就職状況は，昨今の就職難という社会状況も相まって，学生全員の就職を目指すべき大学としては不満足な状態である。企業からのアンケートなどをよく検討して，就職面での達成度を高める努力を続けて行きたい。

5　学習に対する支援：学生定員に対して教員数も多く，少人数教育が行き届いているので，学習への支援は十分達成できているが，ハード面での学習支援環境の整備はさらにゆとりのあるものにする努力が必要である。

6 教育の質の向上及び改善のためのシステム：教員自身の教育活動の評価・改善は，現在のところは各教員の自主的努力に任せている状況であるので，今後は，教員間の相互批判態勢を組織として整える必要がある。各学科会議，教務委員会，全学共通科目運営委員会，将来構想委員会が可能な範囲で改善の努力をしているが，現在検討中の FD 部会の設置によって,教育の質の向上及び改善を図りたい。

本学では，「将来構想委員会」が大学の問題の現状と将来の改善を絶えず検討している。学科内での将来像の検討と併せて，大学の教育環境のさらなる整備を心がけたい。